

## I. 教育事業報告

### 1. 地域人を活用した地域内教育の実施報告

総合経営学部観光ホスピタリティ学科 増尾 均

#### (1) はじめに

「地域人を活用した地域内教育」は、生坂村と本学との協定に基づく事業の1つであり、増尾ゼミは生坂村教育委員会と本事業を2年間に渡り共同で行った。具体的には、明治時代に活躍した生坂村出身の法律学者である加藤正治博士（以下加藤博士）を用い、村内への普及ならびに同村の小学生教育に役立てるというものである。増尾ゼミでは、今まで自治体などと観光資源開発を目的に対外的な宣伝効果を狙い、地元の何かしらの人あるいは物を用いるという事業経験はあったものの、本事業のように対内的に活用する試みは珍しく、従来とは異なった対応が必要となるため、ゼミ教育上非常に意義深いものであった。また、高名な法律学者の業績に触れることができる良い機会となった。

#### (2) 加藤博士の経歴

加藤博士は、明治4（1871）年長野県東筑摩郡生坂村の平林家に生まれ、県立松本中学（現松本深志高校）、第一高等学校を経て、明治30（1897）年に東京帝国大学を卒業。同年12月加藤正義氏の養嗣子となり長女すみと結婚、この際に平林から加藤に改姓した。明治時代は、財政的な理由や社会の風潮から大学進学率は極めて低い時代であった。加藤博士の生家は、代々村おさの家系で当時生坂村では品質の良さから盛んに栽培されていた生坂たばこで財をなし裕福であった。また加藤博士は、6歳から池田町の小学校に往復16キロを6年間通学するなど幼少時より勉学を好んでいた逸話が多数残っている。さらに「信濃の国」の作詞者、浅井洌は旧制松本中学の恩師であり、生涯を通じて交流を続け相互に尊敬する仲であった。

明治32（1899）年に民事訴訟法および破産法研究のため独仏留学。帰国後東京帝国大学の教授になる。独留学時、ベルリン大学日本語講師である巖谷小波主催の白人会という俳句会に親友である美濃部達吉の紹介で出席。これ以降俳句の世界に入っていくこととなった。単に法律学のみで一生涯を捧げた堅いだけの人ではなく、俳人としての一面もあり、「犀水」の名で帰国後約50年に渡り

約3万句をつくった。松本市城山公園にも頌徳碑があるほか、生坂村を中心に各地に句碑が多数残る。

昭和24（1949）年中央大学の初代総長に就任、昭和27（1952）年急性心臓マヒのため急逝（行年81歳）。法制審議会委員・帝国学士院幹事・枢密顧問官など要職を務め、叙位・授章歴もある。また、民事訴訟法・破産法・強制執行法・海商法などの分野で著書・論文は多数残されている。

#### (3) 本事業の内容

本事業は、増尾ゼミと生坂村教育委員会との連携事業であり、2年間に渡り行った。最初は、同教育委員会から対象が小学生であることから紙芝居公演の依頼という形であった。増尾ゼミでは、この依頼を検討し、単なる紙芝居公演では地域を学ぶことにならず、教育効果も薄いと判断し、生坂村そのものを多面的に学び、その上で紙芝居を作製・公演するべきであるとした。そのため、ゼミ活動は、生坂村に関する文献調査や現地調査・さまざまな体験活動など多岐におよんだ。また、紙芝居については、2013年度は小学校低学年を対象に加藤博士の幼少期を中心にしたものとし、2014年度は高学年を対象に俳人としての姿を描くこととした。なお両年の活動内容の概略は以下の通りである。

##### 1) 2013年度の活動

4月、生坂村教育委員会と打ち合わせを行い既に述べたような基本的な枠組みを確定させた。5月から7月までは加藤博士の経歴についてネットおよび書籍などを用いて調べ、ゼミ内での基礎知識の共有化を図った。7月には、第1回ゼミ合宿を行い、生坂村の農村資料館内にある「加藤正治博士頌徳館」の収蔵資料の調査、特に幼少期のものを中心に資料の収集を行った。幅広く集められた収蔵品には貴重な品々が多く、今後のゼミ活動の大いなる助けとなった。しかしその反面、上京後の資料の多さに比べて在村時の資料は少なく、まして幼少期の資料はわずかであったため、後年の回顧録なども参考にして分析・検討を行う苦勞もあった。

8月、日本大学の高橋先生、本学の白戸先生の

ゼミ生と合同ゼミを行い、いくつかあるプログラムの1つとして生坂村との交流を図る目的で村のサークル活動で実施している蕎麦打ち体験に参加した。これ以降、合宿時に集めた資料の分析と並行して生坂村の歴史・観光資源調査・農業など生坂村そのものを学ぶ活動を始めた。

12月には第2回目の合宿を行った。内容は、生坂村教育長から生坂たばこについての講義を受けることと加藤博士の生家から池田小学校までの往復16キロの通学路の調査である。両者は紙芝居の中に出す予定であったため詳細に調べる必要があった。

12月に原案が完成し、これを元に生坂村教育委員会との打ち合わせを行った。ゼミ生が気づかなかった不備など多数の修正点が指摘され、3度の打ち合わせの末、1月になってようやく内容が確定した。紙芝居のストーリーを作る上での留意点としては、小学校1~3年生が対象であるため、言葉はなるべく平易なものを使い、童話的要素を取り入れることにより小学生を引き込み易くした。また、「信濃の国」で有名な浅井涸との関係や「赤地蔵」など馴染みのある人または地元の特徴を取り入れた。一方、紙芝居を作る場面での留意点としては、複数の学生が絵を描くことから、キャラクター・画風・画材の統一などである。

2015年2月26日生坂小学校での紙芝居公演に至ることができた(資料1)。小学生たちは、紙芝居で知っている場面があると歓声をあげたり、公演後には質問がたくさん出るなど大変好評であったように思われる。

## 2) 2014年度の活動

4月、前年度の紙芝居公演の反省会を行い、語り手が台詞を囁んでしまう場面が多かった、説明が必要となる箇所があったなど、今年度の紙芝居公演に役立てねばならない指摘が多く出された。その一方で、昨年度は一生懸命勉強して偉くなることができたというサクセスストーリーであったため、小学生に理解され易いものであったが、今年度は俳人の「犀水」の物語となるため、ストーリー作りの難しさが指摘された。

昨年度は、俳句の調査まで手が回らず、2年目に扱うというイメージからあまり収集していなかった。そのため、5月から7月ぐらまで加藤博士の代表的な俳句の収集を行った。特に「加藤正治博士頌徳館」収蔵の2万2千句以上が記されている「拙作習」は圧巻であった。ゼミ生は俳句に

はあまり慣れていないためか一生懸命時間をかけて理解に努めていた。

前年同様、8月の合同ゼミで生坂村との交流を図る目的で「灰焼きおやき」の調理体験を実施した。

9月の第3回ゼミ合宿では、「加藤正治博士頌徳館」にある俳句の調査、並びに周辺市町村に点在している句碑の調査を行った。特に目を引いたのが加藤博士夫妻の合作の色紙である。加藤博士が色紙に俳句を書き、奥様がその色紙に絵を描いたものである。同館にその時に展示されていた物だけでも10点ほどあり、ゼミ生たちから感嘆の声が漏れていた。俳句と絵が一緒になることによって新たな美しさを醸し出しているようであった。また、2014年8月に顕彰会が卒塔坂公園に犀水句碑の除幕式が行われており、生坂村教育委員会からその説明を受け同句碑の見学させていただいた。句碑には「歩々緩く遅きは克たむ富士詣で」と記されている。これは加藤博士が自らの体験を元にして詠まれた代表作であり、人生は急がず焦らず一步一步確実に踏みしめて進むことが大事であるという意味である。

12月、生坂村教育委員会と打ち合わせをし、今回は「犀水」面を紙芝居にすることになったため、ストーリー作りが難しく難航したものの、加藤博士の人生の出来事と俳句の関わりを中心にストーリー展開させることとした。

2015年2月16日、生坂小学校で第2回目の紙芝居公演を行った(資料2)。昨年と比べて内容が分かり難いのではないかと心配したものの杞憂に過ぎず、小学生たちは昨年同様に楽しんでいった。公演後、担任の先生に尋ねると説明が分かり易かったので理解できたのではないかとのことであった。

## (4) おわりに

ゼミでは、ゼミ生の積極的参加を目指して運営を行っているが、本事業はこれに合致したものであり、また今までとは異なった事業内容であり、ゼミ生の教育に大きく寄与し有意義な2年間であったと思われる。「得る物が大きかった」というのが実施した者全員の感想である。

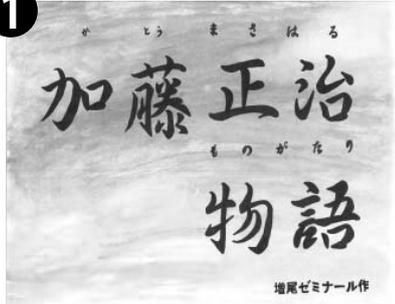
加藤博士の主な研究分野は、民事訴訟法・破産法・強制執行法・海商法などであり、これらに関する著書・論文は多数ある。私は専門が民法でありこれらの分野とは異なり、また古い時代のものであるため、これらの論文・著書を読むことはあ

まりなく、院生時代にわずかに破産法の著書を読んだ記憶が残っているぐらいである。しかし加藤博士の名前は、さまざまな論文に引用されており、一時代を築いた有名な法律学者であることは大学

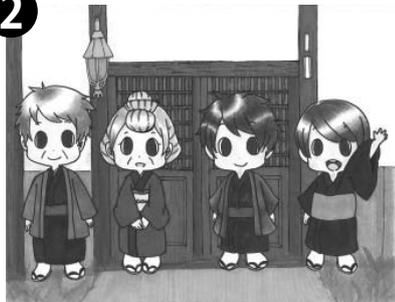
生の頃から知っていた。今回、このような機会を得、地域と法律の2つに同時に触れることができ、様々なご協力をして下さった方々に深く感謝します。

## 【資料1】

1



2



今からだいたい140年前、生坂村に加藤正治という人が生まれました。正治の家はお父さん、お母さん、お兄さん、正治の4人家族です。一番右にいるのが正治で、正治の家では、たばこの元になる葉っぱを育てていました。

3



正治の家が育てていた、たばこの元となる葉っぱは、生坂たばこことよばれ、その当時は、とても人気のあるものでした。正治「これをこうしてっ。」父「正治、こっちのも頼む。」正治「はいはい。」正治は家の手伝いをよくする子どもでした。また、正治は勉強がとても好きで、小学校に通っていました。

4



正治の学校は、家から遠い遠い場所にあります。正治は大好きな勉強をするために、毎日3時間かけて、休まず学校に行きます。今日も正治は朝ごはんを済ませて学校へ行きます。母「正治、行ってらっしゃい。」父「気を付けて行くんだぞ。」正治「はい。いってきます。」

5



正治は学校へ行くために大きな川を渡ります。でも、川には橋が架かっていないので、正治は川を渡ることができません。なので、正治はお魚に船を押してもらって、向こう岸へ行きます。正治「お魚さん！今日お願いします！」魚1「はい、さあ乗って乗って！」正治「いつもありがとう。」魚2「いいんだよ。毎日正治くんが楽しそうに学校へ行く姿が見れて、僕たちはとっても嬉しいよ。」正治「僕は毎日学校へ行けるのが、本当に嬉しいし楽しいんだ。じゃあ行ってきます！」魚「いってらっしゃい。」

6



川を渡ると、その後は、山を一つ越えなければなりません。

本当に遠い遠い道のりを、正治は毎日頑張って学校まで歩いて行くのです。正治「学校まではすごい遠いけど、勉強できるなら、こんな長い道のりなんてへっちゃらさ！」そう自分に言い聞かせながら、正治は山を登って行きます。山を登り終えると、そこには赤い頭巾と着物を身に付けたお地蔵様がいます。この赤地蔵は、いつも山のてっぺんから生坂村を見守っているのです。正治は毎日、赤地蔵にお参りをしていきます。正治「赤地蔵様、おはようございます！」地蔵「おや、正治君、今日も学校かい？毎日こんなに大きな山を登って学校に行くなんて、偉いね〜。」正治「僕は勉強が大好きなんです。勉強ができるなら、山を登ることくらいへっちゃらさ。」地蔵「そうかい、そうかい。こんなにがんばっているんだから、正治君はきっと立派な大人になれるよ。」正治「ありがとうございます。赤地蔵様。では、行ってきます！」地蔵「いってらっしゃい。今日も勉強がんばるんだよー。」正治「はいーい。」こうして、川を渡り、山を越えた正治は長い長い道のりを経て、毎日学校に通っていたのです。

7



険しい道のりを歩いた正治は学校に行っても勉強熱心でした。そのおかげか成績はいつも一番でした。正治はクラスの人気者でもありました。勉強のことにってはみんな正治に聞きました。生徒「正治君この問題どう解くの？」正治「ここでね、掛け算を使えば解けるよ。」正治の教え方はとてもわかりやすく丁寧でした。また、正治が遠いところから学校まで通っていることをみんな知っていました。生徒「よく遠いところからくるね。正治君はすごいや。」正治「まあ、学校が好きだからね。」正治はこう返しました。正治にとって学校とは、とても居心地のよい場所であったのです。そんな正治をクラスのみんなは、憧れの目で見つめていました。



中学生になると正治は、浅井冽先生に出会いました。浅井冽先生は長野県で生まれ育ったなら誰でも歌えるという、あの有名な信濃の国という曲を作ったとてもすごい人です。  
正治「あなたが浅井冽先生ですね、初めまして。」  
浅井冽「初めまして。君が正治君か、一度会ってみたいと思ってたよ。」  
こうして正治は、昼間は学校で勉強し、夜は浅井冽先生の塾で勉強をすることになりました。



正治は勉強が大好きだったので、今の学校を卒業したら、東京にある大学でもっともっと勉強したいと思っていました。  
正治「お父さん、お母さん、僕はもっとたくさんの勉強をするために東京の大学に行きたいんだ。」  
しかし、家のために、正治のお母さんが言いました。  
母「正治、お兄ちゃんは体が弱いから、家の仕事を手伝ってくれる人がいないのよ。正治が家から出ていってしまったら困るわ。」  
昔は、子どもも家の仕事を手伝って、家族みんなで働いていました。お兄さんの体が弱かったため、正治は家に残って、家の仕事を手伝わなければならない、大学に行くことができませんでした。



そうして正治は家の手伝いをする事になりました。  
父「正治、こっちに来て手伝ってくれないか？」  
正治「分かった、父さん。今行くよ。」  
家の手伝いはとても大変ですが、正治は一生懸命働きました。  
兄「俺のせいでごめん、正治。」  
ある時、お兄さんが申し訳なさそうに言いました。

正治「気にしないでよ、兄さん。兄さんの責任じゃないよ。」  
正治はそう明るく言うと、にっこりと笑いました。  
けれども心の中では悩んでいました。  
正治「僕はいつになったら家の手伝いをしないで、大学に行くことができるようになるかな。ああ、勉強がしたいなあ・・・」



そこで知り合いの浅井冽先生に相談をしました。  
正治「先生、僕、大学に行くことが、できなくなってしまいました。勉強がしたいのに学校に通えないんです。これからどうしたらいいのか、もう分かりません・・・。」  
正治は泣きそうになりながら言いました。  
すると、冽先生は  
冽「正治、それなら私の知り合いの塾を紹介してあげよう。そこで空いている時間は勉強をしたらいいじゃないか。もう絶対に大学へ行けないと決まった訳ではないだろう？ だったら今は勉強をして、その時を待つんだ。簡単に夢を諦めたいはいけないよ。」と言いました。  
その言葉を聞いて、正治の胸には微かな希望が宿りました。  
正治「そうですね、諦めないで頑張ってみます。」  
そうして正治は、冽先生の知り合いの塾に通うことになり、家の手伝いをしながら、空いた時間には、一生懸命勉強を続けました。



しばらくすると、お兄さんの体はどんどん良くなっていったので、正治は東京の大学に行くことができるようになりました。  
正治「やったー！東京の大学で勉強ができるぞ！でも…どうやって行けばいいんだろう？」  
そのころ、生坂村から東京へ行くようなバスや電車はありませんでした。  
そこで、正治は「そうだ！東京まで歩いて行けばいいんだ！」と考えたのです。  
そして、生坂村を出発した正治は一週間ほど歩き続け、ついに夢であった東京に到着したのでした。



正治は大学でもたくさん勉強し、もちろん成績も優秀でした。  
大学を卒業した正治は、今度は外国へ行き、もっともっと勉強したのです  
正治「勉強ってなんて楽しいんだろう。勉強すればするほどいろんなことが分かってとってもおもしろい。僕はもっともっといろんなことを知りたいから、ずーっと勉強を続けよう！！」  
勉強が大好きで、いつもこんなことを考えていた正治は、外国から日本へ帰ると、今までたくさん勉強したおかげで、大学の教授という、偉い、えらい、先生になったのです。



偉い先生になった正治は中央大学の卒業式でこんな言葉を残しました。  
「歩々遅く遅きは克たむ富士詣」  
この言葉の意味は「人生、あわててはいけません。しかし楽な方に生きるのではなく、日々の努力を大切にしてください。そうすれば夢は叶いますよ。」ということです。  
正治は、どんなに苦しい時にあっても、決してくじけず一生懸命生きていきました。  
この言葉は正治の人生を表したものでしょう。

【資料2】

1

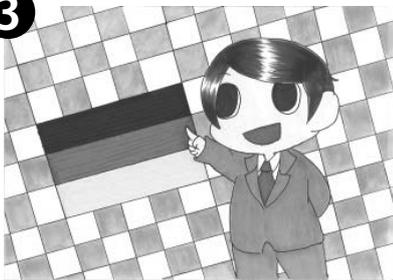


2



昔々、生坂村に加藤正治という少年がいました。正治はとっても勉強が大好きで毎日遠く離れた学校に通っていました。学校へ行くためには川を渡り、大きな山を越えなければなりません。正治「こんな道のり、へっちゃらさ」正治は毎日三時間もかけて学校に通っていたのです。

3



そんな勉強が大好きな正治は、常に成績が優秀でした。正治の家の都合で、勉強ができない時期もありましたが、それを乗り越え大学生になって、法律を勉強するようになりました。難しい法律の本を読んでいると、正治はあることに気がつきました。正治「どうやらドイツは法律の研究が日本より進んでいるみたいだ。」正治はドイツで法律の研究をしたいと思うようになりました。正治「よし、ドイツに行ってもっと法律の勉強をしよう」こうして正治はドイツへ旅立ちました。

4



ドイツに到着してから1ヶ月が経とうとしていました。ドイツに来てからも法律の研究を熱心に行っていた正治でしたが日本での生活を思い出すようになり、最近は研究が進まなくなってきてしまいました。正治「ドイツに来てからもう1ヶ月か、ドイツもいいところだけど、日本のご飯が食べたくなくてきちゃったなー。」正治がそうつぶやいたとき一本の電話が来ました。その電話は昔から親友だった美濃部達吉からのものでした。達吉「やあ正治久しぶり。君がドイツに来てって聞いてね、ドイツでの生活はどうだい？」正治「久しぶりだね達吉。君もドイツに来てたんだね。実は最近日本が恋しいんだよ。」達吉「僕もドイツに来たばかりの時はそうだったよ。でも最近俳句を始めてね、これがとても面白いんだよ。どうだい？君も一緒にやってみないかい？これならドイツで暮らしながら日本を思い出すことができると思うよ。」正治「俳句か。やってみようかな。」こうして正治は俳句と出会い、法律学者として法律の研究をしながら、俳句を作る人のことである俳人としても活躍するようになってゆくののです。

5



俳句についてよく知らなかった正治は、達吉に教えてもらうことになりました。正治「俳句って一体どういうものなんだい？確か、5・7・5で表す文章だよな？」達吉「その通りだよ。この5・7・5の形が俳句の基本的なところだよ。でももう一つ大切なことがあるんだ。それは文の中に必ず季語という季節が感じられる言葉を入れなくちゃいけないんだ。例えば有名な小林一茶の俳句に『やせ蛙負けるな一茶これにあり』っていう俳句があるんだけど、この句の季語は春を感じられる蛙が当てはまるんだよ。」正治「5・7・5に表したり季語を入れたり、なんだか難しそうだね。ところで小林一茶の他に有名な俳人や俳句ってあるのかい？」達吉「小林一茶の他に『松尾芭蕉』っていうとっても有名な俳人がいるんだよ。『閑さや岩にしみいる蟬の声』という句はとても有名なんだ。」正治「その俳句なら僕も聞いたことがある。なんだかもっと俳句について知りたくなってきたよ。」すると達吉が言いました。達吉「有名な俳句がいっぱい載っている俳句集を持っているから正治に貸してあげるよ。」正治「いろいろ教えてくれてありがとう達吉。この俳句集を見て、もっと俳句について勉強してみようよ。」正治はますます俳句に興味を持つようになりました。

6



さっそく俳句を作ってみようと思った正治でしたが、なかなか上手く作れません。正治「俳句を作るのって結構難しいなー。そうだ、せっかくだし、同じ長野県生まれの一茶の句を利用して俳句を作ってみよう」正治は達吉から借りた俳句集から一茶の俳句を探しました。正治「どの句を使おうかな、あっこれなんかどうだろう。『信濃では月と仏とおらが蕎麦』ふるさとの信濃についての句か。よし」正治は一生懸命考えました。正治「『想い出の多さよおらが月と蕎麦』うん。なかなかいい句ができたな。同じ長野県生まれの小林一茶の俳句は正治にとって、一茶がその俳句を作った時の気持ちが良く分かるものだったのです。正治は一茶の俳句を作るコツが分かった気がしました。そして俳句を作ることが楽しくなって来たのです。

7



正治は俳句に夢中になり、暇さえあれば俳句を詠んでいました。ところが、正治はまだ俳号を決めていませんでした。俳号というのは、分りやすく言えばペンネームのようなものです。正治「何かいい俳号はないかな。」正治は悩んでいる内に眠ってしまいました。夢の中で正治は大きな川の前にいました。正治「あれ？この川は生坂村に流れている犀川じゃないか。」川のせせらぎを聞いていた正治は、ふるさとである生坂村を思い出しました。正治「そうだ、俳句を詠んでいるときに、いつでも生坂村のことを思い出せるように、犀川から名前をとって『犀水』って俳号にしよう。」こうして犀水という俳号が生まれました。



俳句に出会ったことにより、ドイツでの生活も法律の研究も充実していた正治は日本に帰ることになりました。  
 正治「こんなにドイツでの生活が上手くいったのも俳句に出会ったおかげだ。そろそろ日本に帰って、自分の経験を活かしていこう。」  
 日本に戻ると正治は、ドイツでの経験を活かし、多くの人に法律の知識を伝え、法律学者として活躍していきます。でも、正治は勉強したくてもできないたくさんの方若者たちと出会ったのです。そこで正治は、自分の過去と重ね、彼らのために力になりたいと考えました。  
 正治「僕にもそんな時があったな。そうだ、彼らのために夏の間だけでも勉強できるところを作ろう。」  
 正治は木崎夏期大学という学校をつくりました。正治は夏の山の湖のほとりで若者たちが勉強している様子を俳句にしました。「夏山や学童めぐる森の湖」



正治にはすみさんという奥さんがいました。すみさんはとても優しく、きれいな人であったため、正治はとても幸せでした。ある日すみさんが絵を描いていたので、正治は声をかけました。  
 正治「すみさん、絵がとても上手だね。」  
 すみ「まあ正治さん、ありがとうございます。実は、天皇のお嬢さんにも教えたこともある、跡見玉枝先生という素晴らしい先生に私も教えてもらっていたんです。」正治はとても驚きました。  
 正治「それは凄いな。ねえ、もし良かったら2人で何か作品を作ってみないかい？僕が俳句を書いて、すみさんがそこに絵を描くんだ。」  
 すみ「まあ楽しそうですね。ぜひやりましょう。」  
 正治「本当かい？ありがとう。」



ある秋の季節、正治とすみさんは一緒に散歩に出かけました。外はすっかり秋の気配が近づき、紅葉は真っ赤に染まっています。紅葉を見た正治は俳句が頭に浮かびました。「紅葉より赤きは人のこころかな」すみさんは言いました。  
 すみ「正治さん、とってもいい俳句ですね。」  
 正治「一番赤いものは情熱を持った人間の心だということを、紅葉が赤いことで表したんだよ。寒くなる秋の季節にはびつたりの俳句でしょ。そうだ、すみさん、ここに、紅葉の絵を描いてくれないかい？きつといい作品ができると思うよ。」  
 すみ「それはステキですね。早速家に帰って絵を描きましょうか。」  
 こうして正治が俳句を考え、そこにすみさんが、きれいな紅葉の絵を描き、とってもいい2人の共同作品ができました。この作品を正治はとても気に入り、それからのこと2人はいつも一緒に作品を作る楽しい毎を送りました。



そんな夫婦円満な生活に悲しい出来事が起こってしまいました。正治の長男が病気で亡くなってしまったのです。正治とすみさんは若い頃に結婚していたのですが、正治が留学したため、子供が生まれたのは遅くなってしまいました。そのため長男をとっても大切にしていました。そんな子が亡くなってしまい、正治は悲しみにくれました。  
 すみ「正治さん、元気を出してください。私がそばにいますから。」  
 正治「うん、ありがとう。」正治はこのような俳句を詠みました。「とめどなく涙しほゆるや秋の雨」  
 正治「これからは楽しかったことも悲しかったことも全て俳句に残して、その時感じた気持ちを忘れないようにしよう。」正治はそう思いました。



落ち込んでいた2人に嬉しいこともありました。2人に孫ができたのです。久しぶりの嬉しい出来事に、正治とすみさんはとても喜びました。  
 正治「なんて可愛い子なんだ。よし、この子の名前は私が決めよう。」あまりの嬉しさに正治はこの子を「正文」と名付けました。  
 すみ「そうだ、正治さん。この気持ちを俳句にしましょう。」  
 正治「それはいい考えだね。よし、俳句を作ろう。」  
 「珠を得てさし上げ見るや皕月富士」この俳句の意味は、初めての孫が5月の富士山のように素晴らしいことを表しています。  
 すみ「わあ、素敵です正治さん。心に響いてくる俳句ですね。正文も富士山のように大きな心を持った子に育ってくれると思いますよ。」  
 正治「そうだね。すみさん。正文、生まれてきてくれて本当にありがとう。」



こうして様々な出来事があるたびに俳句を作っていたため、正治が作った句はいつの間にか2万句以上にもなりました。こんなにたくさん俳句を作った正治は宗匠という俳句の先生になり多くの弟子がつくようになりました。  
 弟子「先生、最近僕、俳句が上手く作れなくて悩んでいるんです。何かコツはありませんか。」  
 正治「俳句で大切なことは素直な心を言葉で表すことだよ。」  
 弟子「なるほど、自分の気持ちを表現しなきゃ先生みたいに、素敵な俳句なんてできませんよね一さすが先生です。」  
 正治は様々なことを弟子に教えていきました。



正治「歩々ゆるく遅きは克たむ富士詣」この俳句は正治の人生を表した句です。これは、人生は急がず焦らず、けれども急ぐことなく、一步一步地を踏みしめて進んでいくことが大切であるということです。この俳句は多くの人にも伝えられてきた句です。このように俳句は正治の象徴であり、俳人屏水としてもたくさん活躍した正治なのでした。